

「狂気」と「玉手箱」——《保育園の日曜日》について

加藤 治代

佐藤真は、私の先生でした。

病気の母を撮影するため、私は東京にある映画美学校のドキュメンタリー科に通い始め、佐藤さんの授業を受けることになりました。この時始めた撮影は、後に《チーズとうじ虫》という映画として、沢山の方に観ていただける作品になるのですが、撮影開始当初の私に、高尚な動機や誇れる程の経験はありません。例えて言うなら、保育園児が「大きくなったらサッカー選手になる」と、サッカーをしたこともないのに日本代表を夢見るくらいの幼稚さと空回りしがちな根性で、電車で片道2時間以上かかる田舎の町から、母の調子の良いとき、私のお金と時間があるときに通っていました。

佐藤さんは、長身で少し猫背、いつも鳥の巣のようなぼさぼさの髪をしていて、よれよれになった競輪のTシャツをよく着ていました。お酒が大好きで、ドキュメンタリーについて語るべき授業中に、競輪の素晴らしさを熱っぽく説く・・・とてもじゃないけど著名な映像作家には見えないのが、その頃の佐藤さんです。

ドキュメンタリー科の生徒はみんな頭がよく、理屈っぽく、とても変わっている人が多かった。それを見るたび、自分がいかに普通であるかということに、密かに安堵したりしていたのですが、加えてどの生徒も、みんな驚くほど・・・優しい。その人たちが「先生」と呼び、慕う佐藤さんも、理知的でお話上手な面白い方です。

「私は母の具合が悪くなると、どうしても母を撮影することはできません」と授業の時、佐藤さんにお話したことがあります。着替えを手伝ったり、食事の用意をしたり、母を車に乗せて病院へ行ったり・・・。入院中も強い抗がん剤の治療をしていた母に付き添い、看病をしているとカメラを持つ手が全くないのです。私にとって一番大切なのは、母あるいは家族であり、決して撮影ではありません。そのことに思い悩んでいると「そんな加藤さんだから撮れる作品が、必ずあります。大丈夫」と言って励ましてくれる、とても優しい方でした。

ただ、ある批評家が「佐藤真は穏やかな顔の下に、何か狂気を隠し持っている」と言ったように、知性だけでは説明のつかない、何か鋭い針のような怖さがある、でもその頃の佐藤さんは、鳥の巣のようなぼさぼさの髪で、その「狂気」に蓋でもしているかのように、とても元気で寛容で、はつらつとしていました。

「いつも、批判的精神を持っていなければいけない」と佐藤さんは授業で何度も言っていました。ドキュメンタリーの人たちは、優しさと批判的精神という相反するものを、常に抱えていることからくる不器用さがあるように思います。

子どもを撮るとのこと

子どもが生まれると、どのご家庭でもビデオや写真で子どもたちの成長を記録します。現在は、ビデオカメラだけでなく携帯電話でも簡単に、そしてきれいに撮影することが出来るし、デジタルで劣化の心配なく保存できるのですから、最強です。

佐藤さんが亡くなった後、私は双子の女の子の母になりました。カメラは重いしあちこち駆け回らないといけない・・・私にとって撮影は少し気の重い作業です。でもこんな私でも、自分の子どもが生まれれば変わることができるかもしれない。可愛さのあまり、人が変わったように嬉々としてカメラを回すようになるのではないかと、淡い期待をしていました。でもいざ母になってみると、全くカメラを持つ余裕などありません。ミルクをあげ、おむつを替え、泣く子を黙らせ、寝かしつけ、掃除、洗濯、食事を作ると、寝る暇も無いのです。赤ちゃんというのは想像以上に何も出来なくて、こちらが手を抜くと死んでしまうのではないかという怖さが常にあります。生き物として非常に無力でか弱い。そんな彼女たちを守り育てるため、愛情だけではなく、義務感、責任感、正義感、闘争心といった使えるもの全部をかき集めて生活していました。私にとって“育児はまさに格闘技”なのです。

子どもが保育園に通い出した頃、少し時間に余裕が出来た私は、保育園へ撮影に行きました。仲良くなったママ友たちに、親の知らない子どもたちの保育園での生活を見せてあげたかったからです。キメが細かくてみずみずしい肌や泣いても怒ってもそれをカメラの前で隠そうともしない真っ新たな自意識が、撮っていてとても楽しい。この面倒くさがるの私でさえ、夢中で子どもたちを追ってカメラを回し続けました。この頃になると子どもたちの活動範囲も広がりママ友同士で助け合ったり愚痴を言いあったり、子どもを介して新しい人間関係が出来ていました。

娘たちが思春期に入ってきた頃、私との関係にも変化が生じてきました。幼いころは素直で可愛らしかったのに、今で

は私が何か言うたび「わかってるよ」と怒ったように返事をします。これを世間では「成長」というらしいのですが、親というのは非常に空しいものだと思うことが多く、と同時に、同じ思いを私が母にさせていた事を、今更ながら反省してみたりもしています。

幼い子どもの映像というのは、その親にとってこそ意味のある記録です。正しかろうが間違っているように、その頃の自分の精一杯の時間と、全身全霊で必要とされた幸せがそこにあるからです。子どもにとって、何某かの価値をその映像の中に見出すには一定の成長と経験が必要なのかもしれません。自分で失恋をして初めてその痛みが理解できるかの如くです。

佐藤さんは授業で、何度かご自身のお子さんの話をしていました。「娘が通っている保育園の保護者同士で、今度一緒に映画を作ろうって盛り上がりまして・・・」。少し照れた様子で、でも楽しそうに話していたのをよく覚えています。

子どものいない日曜日の保育園で仲良くなった親同士が、お酒を飲みながらわいわい楽しく撮影している・・・そんなところに「佐藤真という映像作家」が発動すべき批判的精神などあるはずありません。でも逆にそのことが、この作品をとっても魅力的なものにしているのかもしれない。「佐藤真という父親」の立場から作った《保育園の日曜日》には、子どもの目線に立って考えることの大切さや、何より孤独や辛い事も多い子育てを、楽しいことに引き上げてくれる明快さがあるように思うのです。

浦島太郎

作品の中、お父さんたちが列を作って移動しているシーンが出てきます。列の最後尾に、佐藤さんご自身の姿がありました。動いている佐藤さんを見るのは何年ぶりでしょうか。子煩悩な佐藤さんが、仲良くなったお父さんたちとビール片手に楽しそうに撮影をしている・・・それは私が授業を受けていたころの、競輪のTシャツを着ていたころの、元気な佐藤真、そのままの姿でした。

こんなに無邪気でかわいらしい作品を見て、なぜ悲しく腹立たしい気持ちにならなくてはいけないのでしょうか？

私は、玉手箱を開けてしまった浦島太郎の様に、途方に暮れてしまいました。



《保育園の日曜日》 写真提供：シゲロ

気が付くと、私は佐藤さんが亡くなった時の年齢をすっかり超えていて、私の子どもたちもこの春中学2年生になります。この作品が作られてから20年以上経っていることを考えると、映画の中の赤ちゃんも成人になっているはず。子どもを撮影するというのは、その成長が前提にあり、撮影されてから時間が経てば経つほどその変化が当初の映像に含まれていたものと違う、別の意味を産み落とすこともあります。佐藤真の不在は、私が自覚している以上に大きく、深いようです。どうしてこのままでいられなかったのか・・・《保育園の日曜日》を見て、そんなくやしさを感じました。

無邪気にかわいく歳を取るの、悪いことですか？

もちろん、ドキュメンタリー作家にそんな事が出来るはずも無い。「私は、例え無能と言われようと、絶対、無邪気でかわいいおばあちゃんになってみせる」。時々、そんな事を考えたりしています。

かとう はるよ／《チーズとうじ虫》監督

1966年生まれ。群馬県在住。多摩美術大学美術学部芸術学科卒業後、スチールカメラマンのアシスタントを経験。《チーズとうじ虫》制作後、結婚し現在、二児の母。

第24回中之島映像劇場

ケアする映画をたどる—配布資料をウェブに再掲

発行：国立国際美術館

資料発行日：2023年3月18日